

優秀賞

英語学習のためのストラテジーの活性化のための実践

なかの
静岡県富士宮市立大富士中学校
中野 聰
さとし

1 はじめに

単語学習の重要性についての認識が高まって久しい。というのは、「コミュニケーションの基礎基本は単語である。」と再認識されて、その単語はどのようにすれば、効果的に覚えることができるのかということに意識が高まってきたからである。

私自身も生徒に向き合いながら、「指導要領に定める単語を覚えただけでは21世紀を生きる生徒にとっては十分とはいえない。将来出合うであろう、あるいは自分が必要となるであろう単語をどのようにしたら理解し、記憶して使うことができるようになるのかを知り、身につける必要性があろう。そういう力を身につけた生徒が生きる力を備えた自立的な学習者といえる。」と考えて実践を進めてきた。本稿では、「中学校3年間でどのようにこの力を培うべきか」を模索した実践を述べたい。

2 基本的な実践の姿勢

実践計画をたてる際に、「自から単語を学ぶ力をもった生徒を育てるために各自に適した学習のストラテジーがあることを意識させ、単語を学習しながらその学習法も身につけることができる。」ことを目標とした。具体的には、以下の4点を方針とした。

一方的に教師が与えるのではなく、教師の提案によって活動をした生徒の表情や気持ちに機敏に反応しながら「学習活動を作り

上げている」という実感を持たせたい。そのことで生徒一人ひとりに学習者としての意識を高める。

単語を覚えるというと単語集を丸暗記する学習をイメージしやすいが、オーラルコミュニケーション活動の中でもその目標が果たせるように工夫していく。

一人ひとりの個性を大切にし、より効果的な覚え方があるかもしれないということを無意識の内に感じる機会を与える。また、一人ひとりにとって効果的な単語学習方法には違いがあることを互いに認めていく雰囲気をつくる。

「単語が分かる」ということの条件を、単語に対応する日本語が分かり、文中での働きを理解し、文の中へ入れてほぼ正しく使用することができる」とし、それらを単語を学習する目的としてとらえる。

3 3年間のシラバス

ここでは、3年間の流れを明確にするために、大まかな時期と、内容、活動、時数などを表にして示す（資料1）。

4 具体的な活動

上の活動の中で「夏休みに出会った単語を調べてみよう。」「意味の分かりにくい単語を別の英語で言い換えよう。」「絵について文を言ったり書いたりしよう。」「自分の意味地図を作ろう。」を詳しく説明する。各々の活動

活動番号	時期	内 容	目的	活動内容	時 数
1	1年 9月	夏休みに 出合った 単語を調 べてみよ う。	<ul style="list-style-type: none"> ・日本での日常生活にも英語にたくさんふれていることに気づかせる。 ・分からない単語を調べる時の方法として英和辞典で調べるという方法を理解させ、活用できるようにさせる。 ・人に尋ねる、想像してみるなど、辞書を引く以外の方法も使用していることに気づかせる。 	夏休み中に出合った単語を記録させる。 基本的な辞書の引き方の説明をし、練習をさせる。 夏休み中に出合った単語の意味を理解させる。	説明、練習は「プラス1」扱いで2時間。英語の辞書の活用練習は毎時間ウォームアップを兼ねて7分ずつ10回行った。
2	1年 11月 ～ 12月	はじめて 出合った 単語の意 味を確認 して覚え よう。	<ul style="list-style-type: none"> ・よい学習者がどのように新しく出合った単語の意味を覚えるのかを確認する。 ・各生徒の単語学習の実際を知る。 	未習単語30個を提示し、4週間でできるだけ覚えさせる。この際、日本語の意味はいっさい示さない。 学習の記録をとらせる。この学習の記録は週に1度教師が目を通して、励ましの言葉を与える。 この単語テストを4週間後に実施し、効果的な学習者とそうでない学習者との違いを明らかにする。この情報収集のためにインタビューも必要に応じて行う。 単語学習の効果的なストラテジーをまとめる。	目的と活動内容の説明は、「プラス1」扱いで1時間。経過観察は、4週間。テストは5分で実施した。
3	1年 2月 ～ 3月	効果的な 覚え方を 参考にし て新しい 単語を覚 えよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的な単語学習ストラテジーを身につけている生徒の実態を知らせる。 ・それらのストラテジーを参考にしてより自分に合った学習ストラテジーを身につけさせる。 	効果的な学習ストラテジーを紹介する。新たな未知語30個を提示し、4週間でできるだけ覚えさせる。 学習の記録をとらせる。その学習記録は週に一度教師が目を通して、励ましの言葉を与える。 この単語テストを4週間後に実施し、前回よりも効果的な学習方法が発見できたかを確認させる。	実態の紹介は、「プラス1」扱いで1時間。経過観察は、4週間。テストは5分で実施した。
4	2年 10月 ～ 11月	意味の分 かりにく い単語を 別の英語	<ul style="list-style-type: none"> ・英語の単語で理解しにくいものについて英語で尋ねるようにさせる。 ・既習の言い方を利用して新しい単語を説明させる。 	文の中で知らない単語が出てきた場合「別の語で言い換えてほしい。」と英語で言えるようにさせる。	目的と活動内容の説明は、「プラス1」扱いで1時間。練習は

資料1／シラバスの概要

		で言い換えよう。		単語の言い換え(パラフレーズ)の方法を確認し,スムーズに言えるように練習させる。新出の単語についてパラフレーズする機会を与える。	毎時間ウォームアップを兼ねて7分ずつ10回行った。
5	2年6月	絵について文を書いたり書いたりしよう。	・一部定型の会話文を楽しみながら文を書かせる。 ・書いた文について級友が訂正する機会を与え,モニターラー力を意識させる。	絵をもとにして級友同士で2分間会話をさせる。 その会話で話した文,あるいは話したかった文ができるだけたくさん書かせる。 書いた文の中の間違いや日本語のままのものは,他の生徒に訂正や付け加えをさせる。	毎時間ウォームアップを兼ねて7分ずつ10回行った。また,訂正されたものはお互いに見直す機会を作った。
6	3年6月	自分の意味地図を作ろう。	・単語の意味地図の存在を明らかにする。 ・この意味地図の利用によって単語量を増加することをめざす。 ・また,生徒一人ひとりにとって覚えやすくするためのヒントを探すことができる。	“apple”というキーワードを与えそこから意味地図をつくる。それぞれの単語のつながりを反語,類語,下位分類,など「~つながり」と呼んで色鉛筆なども使って区別させる。 生徒自身の意味地図の傾向を知らせ,他の生徒の傾向も知らせる。	意味地図の説明と,キーワードを与えて意味地図を作り,分類するのに「プラス1」扱いで1.5時間かかった。
7	3年9月~12月	英語の日記をつけよう。	・知らない単語を使いたいという動機づけとしたい。 ・文の中で単語を正しく使うことができるようになる。	ノートに絵日記風に家で書くように指示する。 1週間に1度提出させて,大きな間違いについてアンダーラインを引いて返却する。 そのアンダーラインの部分を自分自身で訂正させる。	説明は「プラス1」扱いで20分。経過の報告などは時々便りなどに載せて行う。
8	3年3月	英語で絵本を作ろう。	・英語で中学2年生にも分かるように絵本の英文を作る。 ・相手の理解度を想定しながら英文を使って説明できるようにさせる。	好きな日本語の,あるいは英語の絵本を選んで,それを自分なりの英語に改めて直す。 画用紙に絵も描きながら,英文も書き込む。 級友同士間違いがないかを確認し合う。	目的と活動内容の説明は,「プラス1」扱いで15分。製作に3時間かけた。

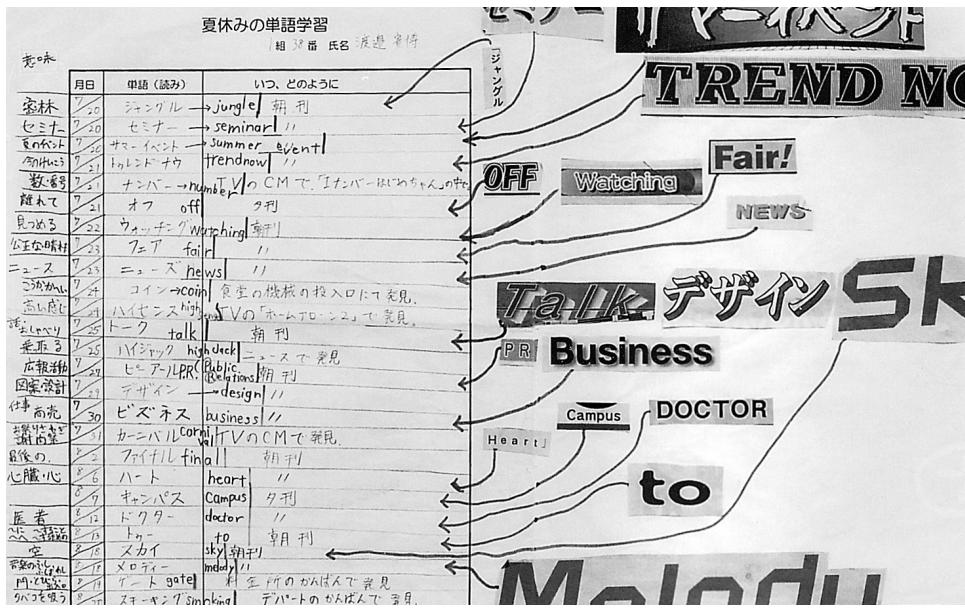
(表の中の「活動内容」の,については,平成11年度の英検助成金の対象となったので,英検協会から発行予定の報告書をご覧いただきたい。)

に対する生徒の表情、反省点などもまとめる。

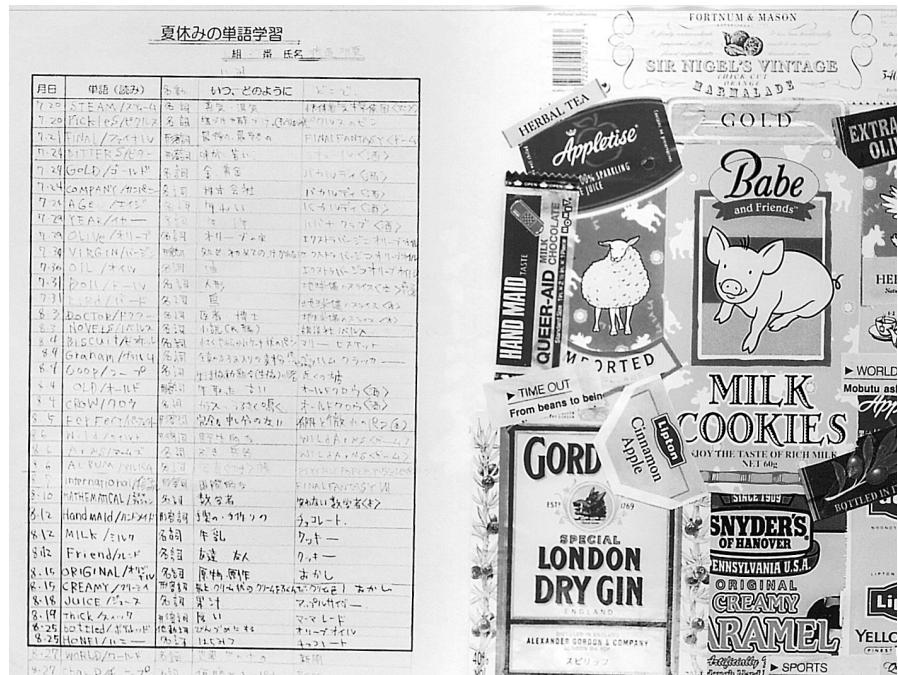
(1) 夏休みに出会った単語を調べてみよう。

1年生の夏休み中に、生徒には、自分たち

が出会った単語を事前に配布した A3判の用紙にメモし、もし印刷されたものであれば、貼り付けるように指示した。下に載せた2つの資料がそれである。資料2「T君の夏休み



資料2 / T君の夏休みの単語学習



資料3 / Sさんの夏休みの単語学習

英語科学習指導案

指導者 中野聰, 関恵子

1 日時 平成11年9月28日(火曜日)第3校時

2 学級 1年4組(38名)

3 題材名 「身の回りで使われている英単語」(プラス1教材1/2)

4 題材の目標

関心・意欲・態度

・単語を調べる活動に積極的に参加しようとしている。

・他の生徒が知っている英単語についてどんなふうにして知ったのかに興味をもち,自分自身も新しく接した英単語に気付こう,また知ろうとしている。

表現

・“夏休み中に出会った英単語”について読めて,言うことができる。

・分からぬ単語について,“What does it mean?”など友達に簡単な英語で質問することができる。

理解

・友達や自分自身の出会った英単語について,辞書などで調べたり友達に聞いたりしながらその意味を理解することができる。

知識・文化

・英和辞典の引き方について知識がある。

・日本語と英語が同じ意味概念を共有しているとは限らないということに気付く。

5 授業計画

時数	学習内容と生徒の意識や活動	評価の観点
1	<ul style="list-style-type: none">夏休みにみんなが出会った単語にどんなものがあったかな。・知っているものもあったけれど,知らないものもいくつかあった。知らない単語に出会ったら,どうやって理解すればいいんだろう。・友達や家族,そして先生に聞いてみればいい。・辞書を使って調べてみればいいね。	<ul style="list-style-type: none">・知らない英単語に出会った時に,興味を持ってその意味などを知ろうとしている。
2	<ul style="list-style-type: none">どんなときに夏休み中に英単語に出会ったんだろう。・ラジオ,歌,パソコンゲーム,新聞,家族との会話で多く出会ったんだ。	<ul style="list-style-type: none">・実際に調べてみることによって,調べ方を理解し,出会ったいろいろな単語をこれからも調べてみようという気持ちになっていく。

6 本時の指導

(1)本時の目標

英単語の調べがまだ不慣れで,夏休みに出会った英単語について意味がよく分からぬ生徒が,他の生徒が出会った単語の意味をグループや個人で調べることによって,簡単な単語について単語の調べができるようになり,いろいろな英単語が生活の中にあることを意識して,これからもいろいろな単語に出会おうという意識を高めるようにする。

(2)授業構想

一人ひとりは,英語に関心があり,学習に対する意欲を持っている。これまで,単語については教師が意味を提示したり,事前に調べてきた生徒が発表する程度であった。夏休みに出会った単語をプリントにメモしてきた生徒が34名いた。残りの生徒は一つも出合わなかった。前時に単語調べの方法について分かっている生徒が,グループで共通の単語を調べることによって,簡単な単語調べができるようになってくるはずである。

この時間は,T.T.授業である。T.T.による個別指導の多様化に焦点を当てて指導に当たりたい。

中学生用の簡単な辞書では,出でない場合もあるので,図書室で授業を行うことによって,語彙数多い辞典も気楽に使うことができる。また,図書館にくれば,いろいろ調べることができるという意識を持たせたい。

(3) 指導の過程

学習段階	予想される生徒の意識や活動と教師の働き掛け	教師の支援及び評価等
つかむ	<p>単語調べ競争をしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生と同じくらいには引きたい。 ・ありそうだけど、焦ってしまってうまく見つからない。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> “エスポット”の宣伝を使って調べ方の確認をしよう。 </div> <p>highは、出ていたけど、qualityとmerchandiseは持っている辞書では出でていないな。</p> <p>広告では、よく見るけど「高品質商品」という意味だったんだ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> みんなが出会った10個の単語をグループで調べながら、どんな点に気をつければ速く正確に引くことができるか確認しよう。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・cuteは出ているけれど、thermometerは出でていない。 <p>簡単な中学生用の辞典には出でていない単語については、中英和辞典や大英和辞典を調べるといいことを伝える。</p> <p>読み方が分からぬ生徒には、発音記号でなくてカタカナ表示の辞典があることを伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・hard lensとpowder sprayはまとまつては出でないね。 <p>「途中が開いているから別々に調べればいいのじゃないか。」と気がついた生徒に、まだ気づいていない生徒は聞きに行くように指示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・No Mercury Addedはひとつひとつの単語の意味は分かるけれど、全体で何を言いたいのか分からぬ。 <p>これは文の省略で、「水銀は一切加えられていない。」という意味になるということを教える。</p> <p>引いた班からT1の所へ行って正しいかどうか確認をする。その際、間違いの箇所を指摘して、もう一度引き直すようにさせる。</p> <p>引き終わった班から、自分の出会った単語について一人ひとりが調べてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人で引くほうが、大変だ。 <p>辞典は、自分が分からぬときに自分で引くことが多いので、大変でも自分で引く癖をつけるようにがんばろうと励ます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏休みに出会った単語がないから引くものもない。 <p>広告などから単語を見つけ出して3個は引いてみるように指示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんあって調べきれない。 <p>全部調べることはないので1分で1個以上は調べるようにしようと目安を示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一応夏休みの間に調べてあるので調べる必要がない。 <p>間違って調べているものについては前もってマークして、調べ直すように指示する。また、間違いの生徒には、もう一度大辞典で調べてみようと指示する。</p> <p>自己評価カードに勉強になったことを書いてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・速く引けるようになりたい。 ・いろいろな単語に出会ってたくさん調べてみたい。 <p>これらの感想を発表させて意識を高めたい。</p>	<p>教師も一緒に引くことによってどのくらい早く正確に引くことが目標なのかを自然に理解させる。</p> <p style="text-align: right;">(交)</p> <p>各グループに、リーダーとなるべき生徒と個人別の支援を必要とする生徒がいるように、教師がグループ分けをしておく。</p> <p style="text-align: right;">(交)</p>
追求する		<p>T2は、図書館司書(librarian)として分からぬことについて質問されたら答える役割を演じ、T1は10個の単語を調べ終わった班が正しく引くことができているかを確認する。</p> <p>評 友達や自分の出会った単語について、辞書などを調べたりしながらその意味を理解することができるか。</p> <p>T1は、グループ1から7までを、T2は8から13を中心に引き方の分からぬ生徒に支援する。</p>
まとめる		<p>Hが引き方が分からぬ場合はアルファベット表を提示して、どこまでの文字が引けて、どこを今引いているのかをはっきりさせる。</p> <p style="text-align: right;">(個)</p> <p>改善したい点ばかりでなく、うまくいった点についても反省として書いたほうがいいことを確認する。</p> <p style="text-align: right;">(交)</p> <p>評 (観察・自己評価)</p> <p>評 自分の辞書調べと出会った単語の量に着目しながら、単語に出会う機会に目を広げて意欲を高めていく。</p>

の単語学習」は指示した通りの作り方である。左端の意味の部分は、9月に入ってから授業で友達と助けあいながら調べた結果である。資料3「Sさんの夏休みの単語学習」では、すでに単語の意味も夏休み中に調べてあることが分かる。

9月当初、生徒全員の単語学習用紙を集め、何を中心に取り上げたら生徒が興味・関心をもち、しかも英和辞典の効果的な活用方法を知らせる機会となるかをクラスごとに考えた。あるクラスでは資料4のような授業案を考えて実施した。

生徒は、大変意欲的に辞書の使用に取り組んだ。辞書引き競争で意欲が高まったことに加えて、ただ辞書を引くだけでなく夏休みに自分が見たり、聞いたりした単語の意味を正確に知ることができるという目的意識が明確になったことがその原因の一つであろう。また、L-L教室では、各机に英和、和英辞典が常備されているので、その後自然とよく辞書を引くようになった。

この活動の問題点として、「広告などを貼ってもよい。」という指示に過剰反応したためか、出合った単語として書かれた英単語を示す場合が多かった。これは、書かれた言葉のほうが接する機会が多く、また、形に残りやすいからとも考えられる。

“No Mercury Added”のように辞書を引いただけでは分かりにくいものもある。この場合には、受け身形と省略を認識しなければならず、教師などの支援がないと分かりにくかった。

(2)意味の分かりにくい単語を別の英語で言い換えよう。

2年生の2学期に行う活動である。コミュニケーションストラテジーの一つに言い換えの能力をあげている。“I'm sorry I don't understand the word.....”などと言って自分の理解できない点をはっきりさせることと、

英語で思いつかないある単語を言い換えることで、コミュニケーションを円滑にとることが可能であると考える。ある程度英語でそのことを説明したあと，“What do you say in English?”と最後に尋ねれば単語学習は自動的に進むことになる。これを生徒が活用できるようになるためには、ある程度の訓練が必要である。

まず、どのように言い換えが可能かを提示した(資料5)。

会話をしていて分からぬ單語を言われた場合、こんなふうに始めましょう。

1) その言葉が分からぬと言いたいとき。

I'm sorry I don't understand the word.
You said, "... what?"

2) 別の単語で説明してほしいとき。

Please explain it in another word.

英単語を忘れてしまったり、相手がその単語を知らなかつたら、違いを説明しましょう。話が途切れないと大事ですね。

1) 時間的に説明したいとき

It's next to... (...の隣です。)
It's after... (...の後です。)
It's before... (...の前です。)

2) 状態を説明したいとき

It's color is... (色は...色です。)
It's a liquid. (液体です。)
It's a solid. (固体です。)
It's bigger than... (...より大きいです。)
It's smaller than... (...より小さいです。)

3) 反意語、同意語と言いたいとき

It's has the same meaning as...
(...と同じ意味です。)

It's similar to... (...と似た意味です。)
It's the antonym of...
(...の反対語です。)

It's the opposite of... (...の反対語です。)

4) 例を示して言いたいとき

For example, it includes... and..., and...

資料5／話してみよう！あんな時 こんな時12(言い換えのためのヒント)

この実践による効果として、できるだけ英語で説明しようという意識がまず教師に生まれた。1学期からこれを計画していたので、毎時間使用する学習プリントには新出単語をやさしい英語で言い換えておいた。

1学期中は日本語の意味の確認はするが、言い換えがしやすいものについては英語で説明をするという習慣がついた。日本語を確認するだけの活動よりも生徒により緊張感が生まれた。

生徒もこのことに慣れていたため、1時間の導入説明だけで十分に意図を理解できた。また、ALTとのTT授業でも、言い換えによって英語だけで分かり合えるという意識を生徒がもつことができてきた。

この活動をグループ内だけでなく、クラス内でのグループ対抗や「どのクラスが同じ時間内により多くの単語をALTに説明することができるだろう」というタイムレースを取り入れることで意欲を維持し、実際に伝わることを体験するという言い換えの意義をさらに深く理解した。

反省点としては、タイムレースを導入したため、完全な文を言わずに説明しようとしたり、難しいものはパスしてしまう傾向も見られた。今後は、文で言うことと、難しい単語であっても必ず挑戦してみるような取り組みができるようにしたい。

(3) 絵について文を言ったり書いたりしよう。

2年生の1学期に行う活動である。毎時間のウォームアップを兼ねて、2分間の会話を行った。その際、まず、「話してみよう！あんな時 こんな時11」(資料6)で会話のモデルを示した。

これに慣れてきたところで絵を配布し、その絵の場面について話すようにさせた。絵は英検3級の2次試験で使用したものである。最初は話すことに戸惑いをもっていた生徒も、「毎時間やるから慣れてきた。」と語り、3週

友達と会話するためには、こんなふうに始めましょう。

A: Good morning, ~. How are you?
Hello, ~. How are you?
B: I am fine, / so so. / ill. / thank you.
And you?
A: I'm fine, thank you.
What day of the week is it today?
B: It's Monday, Tuesday, Wednesday,
Thursday, Friday, Saturday.
what day of the month is it today?
A: It's May 30th. It's June 27th.
How's the weather?
B: It's fine. / cloudy. / rainy.
Look at this picture.
できるだけたくさん話をしましょう。応答もしましょう。
A: Oh, it's time. Thank you, I enjoyed talking with you.
B: Me, too. Thank you.

資料6／話してみよう！あんな時 こんな時11

間ほどで2分間ほぼ全員が話している状態になった。しかし、話している文が正しいのか、あるいは、話したとしても書くことができるか把握できない。

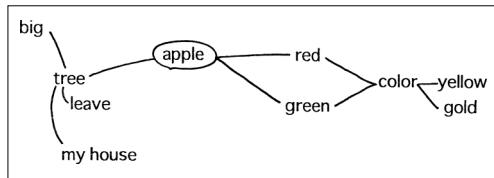
「文を書く」の部分では、ペアで会話練習をした後、一人に1分ずつ時間を与え、「今日絵について話した文をいくつか書いてみよう。友達の書いた文に間違いなどがあったら訂正や修正をしてあげよう。」と指示した。限られた時間内で自分の話した文でこれまでだれも書いたことのない文を書こうとするために、前に書かれた文を読みとらなくてはならない。そこで、知らない単語があったら級友に尋ねたり辞書を調べたりする。

(4) 自分の意味地図を作ろう。

3年生の1学期に行う活動である。これは、心的辞書とも呼ばれ、「語は、一つひとつがばらばらに存在するのではなく、語彙のネットワークとして存在する。」(McCarthy:

1990)と考えられた。「この心的辞書を顕在化させるために、連想法を使うこともできる。」(Sokmen, A. L. : 1993)とする考えをとった。

具体的には、それぞれの生徒に任意の単語を一つ書かせ、その単語から思いつくものをつぎつぎに書きつなげていく(資料7)。



資料7 / 語彙のネットワークの例

この際、英語は思いつくが綴り字が不確かな場合力タカナで書いてもよいことにした。30分で書いたものを分類方法を説明しながら色鉛筆でつながりを識別した。この分類方法は、谷口(1995)の連想法とHatch and Brown(1995)の単語関連づけの方法とを参考に作ったものである(資料8)。

その結果、「どの生徒がどのような連想方法で心的辞書を作りあげているか。」が明らかになる。「こんなふうに頭の中で単語がつながりあっているなんて不思議だった。友達

意味	
類語	(例) big→large
反意語	(例) big→small
共起関係	(例) drink→juice, study→English
上位概念	(例) summer, fall→season
下位概念	(例) season→summer, fall
同格	(例) blue, red, yellow, green
属性	(例) banana→yellow→sweet
所有、所属	(例) school→class
綴り字	
字形	(例) too→to
熟語	(例) look→look like
発音	(例) Ms.→his
エピソード	(例) coffee→hot→good
イメージ	(例) moon→hamburger
その他	

資料8 / 分類方法とその例

は、いろんな色でつながっていたから、いろいろ考えている証拠かなと思った。」とある生徒が、感想に書いている。この生徒に限らず、全員が興味をもってこの活動に取り組んだ。この後の授業では、「brown」と言う単語が出てくると、「brown, red, white, blackなどを一つにまとめて何といいますか。」という質問に、「Color. これって、この前に意味地図でやったやつですよね。」との反応が返ってきた。生徒は、単語を覚えようとする過程で、単独で覚えるよりも関連性を重視したほうが覚えやすいということを学びとり、授業で学習した関連カテゴリーを多く使うようになったと考えられる。そのため、これは単語学習のための有効なストラテジーであると感じた。

この活動での問題点は、分類にやや時間がかかった点である。1回の分類方法の説明だけでは分からず、教師が授業後回収して色分けした生徒が各クラス2割ほどいた。

また、この意味地図作りを8か月後になって再び同じ条件で実施した。質的に反意語、上位概念、下位概念、エピソードが増えた。また、30分間の産出単語数は、15組から23組に増加している。しかし、この取り組みの影響か否かは明らかにできなかった。

5 | 活動全体を通しての反省

基本的な実践の姿勢を「2」で4項目あげた。今まで述べた実践をこれらの視点から反省していきたい。

生徒と教師が作り上げる授業であるという実感はあった。授業の終わりに毎回書かせる一口感想の中でも、「~をまたやりたいのでよろしくお願ひします。」というリクエストや、「今日の活動の意味がほとんど分からなかった。」という判定、「テレビ番組でやっているあの方法でやればみんながもっとやる気になると思う。」という助言

などが数多くあった。

オーラルコミュニケーション活動の過程で、単語も自然に学んでいくという姿勢が身についている。教師の説明にも聞き入ることができるようになった。そして、分からぬところは、分からぬということを英語で言い表すことが自然にできるようになり、オーラルコミュニケーション活動の中で単語も学んでいこうという姿勢や雰囲気ができつつある。

「一人ひとりは、学習のストラテジーが違うんだよ。」という私の語りかけに、最初はキヨトンとしていた生徒たちが、「～君は、書かなくても覚えるって言ってるけど、僕は書きまくって覚えるんです。」という。「問題出してやるね。」と言いながら、言い換えをしてその単語を当てさせようとする生徒を見ていると、成長しているなと感じる。いちばんいいのは、生徒同士が温かな雰囲気で授業に取り組んでいることである。「日本語が分かる」という点については問題もあった。「見る」という日本語に対応する英語が幾つかあるので、日本語がただ分かるだけでは十分とは言えない。ただ、単語を文の中で正しく使うことを目指すと、語順や単語の位置、各品詞にも自然に興味をもつようになってきた。

6 |まとめ

「コミュニケーションの基礎は単語力である。」ととらえて、授業に種々な活動を盛り込んできた。生徒が指導者である私たちの意図をよくくみ取って活動してくれたことが、これら一連の活動の成功の源と言える。手前味噌であるが、生徒の反応を大切に考えてきたからこそ生徒は、指導者の意図をくみ取って活動しようとしていたようにも感じる。

「単語をいくら書いても覚えられない生徒」に対して、なぜこれだけ書いても覚えられな

いのだろうと焦りを感じた。そして、無理して覚えさせようとしても効果が上がらないことに、生徒は戸惑いと諦めを感じ、教師がその生徒の別の部分にその因を探してしまう。これは、大きな間違いであったと実感している。

常に「なぜ覚えられるのか？ どうやったら効果的な学習者になれるのか？」を追及していく姿勢こそが求められよう。そのためにも、今後も指導者の進める授業計画や3年間を見直したシラバスデザイン、そして、教室における第二言語習得の実態を体系的に調査することが大切であろう。これまでまとめた実践はあくまでも限られた条件でうまく行った例にすぎず、一般化することは難しい。

筆者は、毎時間の活動について自己評価カードに一口で感想や反省を書かせることにしている。その中から生徒の活動への関心、反応、改善要望などが出てくる。課外にそれらの感想に目を通し、授業での状況に心を配りながら次の活動を考えていくことは、大変だけれどもやりがいのある楽しいことだと感じはじめている。